

2023年11月

課題本 『おもかげ』

浅田 次郎/著

毎日新聞出版

2017年

◆◆◆11月の読書会から

先月はノンフィクション、今月は小説と分類は違えどどちらも死をあつかっている課題本だったので様々な感想が出ました。先月の感想文を読んだの振り返りもいつもより時間をかけて盛り上がりました。「人は必ず死ぬ、でも一度しか経験できない」。いつか来るその時をどう迎えたいかを考えるきっかけになったのではないかと思います。

今月の課題本『おもかげ』は浅田次郎の小説です。定年の日に倒れた主人公竹脇正一がベッドに横たわる自分の体から離れてさまざまな人に会う、不思議な物語でした。ノンフィクションの課題本が数か月続いた後の久しぶりの小説。その世界にどっぷり入ることのできた人もいれば、さまざまな登場人物と主人公の関係を理解するのに少し苦労した人もいたようです。

「主人公の出自を肯定的に考えるか否定的にとらえるか、それによって大きく違ってくる」「一方の見方ではなく同時に反対も存在すること」。とても大事な言葉を先生からいただきました。今月の読書会は感想の共有だけではなく参加者それぞれの発言から考え方のヒントを得た時間になったのではないのでしょうか。

(文責:森下)

2023年11月竹原読書会 『おもかげ』浅田次郎

吉川五百枝

【忘れ得ぬ人は、必ずしも忘れてかなうまじき人にあらず】(国木田独歩)という名文句も思い出させて、忘れ得ぬ「おもかげ」にときめきを感じる題だったが、この作品の場合、それは最終的には1人の人の「おもかげ」に集約される。

自分をこの世に誕生させた自分の知らない「母」。主人公は、縁のある人達によって生きさせてもらった65年の人生を、集中治療室のベッドの上で振り返るのだ。

中心人物は、竹脇正一。会社の繊維部門を無事に65才の定年まで勤めた男である。

退職の日、会社が開いてくれた送別会を済ませ、いつも通勤に使う地下鉄の電車の中で彼は倒れた。結果として意識不明に陥った体を集中治療室のベッドに預ける身になっているのだ。体は集中治療室に在りながら、幻覚か幻想か、現実から遊離した体験として「おもかげ」を映し出しながら物語は進む。

主人公は、自分の出自と、そこから生きて来た65年の人生の辻褄を合わせるように思い出を巡らせる。自分史だが、編年体で書く自分史ではない。

登場人物は「僕」とか「俺」とかに変わり、正一自身なのか正一に関わる誰かなのか、しばらくは解らない。人物の特定にうろたえることの多い小説だった。

忘れざる人々は、主人公に合わせて年を取り、また、若返る。どんな姿になっていようと、変わらない年齢差が細いながらしっかりと場面を構成する。

主要な登場人物はそれほど多くはない。竹脇正一・妻の節子・娘の茜・夭折した息子の春哉が家族を成し、それに茜の夫である大野武志(タケン)と彼らの子加わる。外側は正一の「母」・正一の同級生であり勤め先の社長堀田憲男・正一の幼なじみでありタケンの親方の永山徹(トオル)などがいて、濃い関係を滲ませている。

紙数をたっぷり使っているだけあって、この外側のさらに外側には、灯籠の紙が映し出す絵のような出来事がいくつもあらわれる。

その人が正一どういう関係にあるのか読みとらなければならないし、その前に、何歳の時の正一なのかも気をつけなければならない。人物配置を理解するのに時間がかかる。こういうのが、小説のおもしろさなのだろうが、かなり厚い本の部類に入るだけに人物の出入りを追うのに疲れた。

母と子がお互いに生きるために選んだ道は、母がわが子を捨てて他人の手で育ててもらったことだった。その時母は15歳。そしてその時の子は生きて、65歳の定年を迎えていた。戦後間もなくの東京で、地下鉄車両という黄色い箱の中に赤ん坊は置き去りにされた。電車に赤ん坊を残して立ち去った母。父は誰かわからない。名字も名前も明らかではないその子は、他人に付けてもらった竹脇正一という名前で人生が始まる。

人の身の上に起きることは、幸と不幸、喜と怒、喜と憂、楽と哀、いずれも表裏一体をなしている。どちらか片方が表に現れると、その裏側は逆の色を帯びているのだ。とすれば、どちらかを表に選んで“自分は幸せなのだ”と思えるかで、その人生の味わいは変わってくる。正一は、常に肯定的な明るい方を選んだ。それ故、自暴自棄になることがなく、人事不省のベッドでも誰かが自分の事を気にかけてくれている。

正一は【危ういと感じたとき手を握ったり肩を抱いてくれる「母親」という種族を知らない。】けれど、そいう【種族】ではないが、同じ養護施設の幼なじみのトオルが手を繋いでくれた。繋ぐ手が次々と増える。同期の堀田が、妻の節子が、娘の茜が、茜の夫のタケンが。それらの人達が、正一に、人生の明るい見方を示して関わって来ているのだ。思い出すに値する人になっている。

幼くして正一夫婦をこの世に置き去りにして亡くなった一人息子の春哉もそうだ。正一夫婦にとっての喪失感は「忘れよ」という言葉によって伏せられた。しかし、地下鉄の電車の中でであった幻影の春哉は、100才になった正一とまたあおうと告げる。

地下鉄は、赤ん坊の正一が、置き去りにされたので生き延びた場所。長い間の会社員生活を支えてくれた場所。意識を失いながら助け出された場所。黄色い揺り籠。

それを身動きできぬまま脳の中でいくつもの人生の場面として思い返している。遊離体験とよぶのだろうか。それは、小説が創り出した架空の話なのか。

全ての感覚が休眠状態で、チューブに繋がれている人を看病すれば、見ている側が苦しくなることがある。しかし、そうでもない場合もあるらしい。

竹脇正一がベッドから動けない間の「おもかげ」をめぐる時間旅の話は、現実離れしてい

るようだが、ファンタジー的な小説だから起きる事だというものでもないと思える。

私も癌の発生で何時間にもわたる開腹手術後、周りから見ればさぞ苦しそうに見えるだろうなど脳内で考えていた。もちろん身動きは出来ない。しかし、脳内では、全く苦しくはなく自由で、見え聞き考え、動画のように美しい景色も見られた。科学的にいうと、苦痛が発生して脳内の酸素量が低くなると、反比例のように麻薬のような物質が増えるのだと聞いた。エンドルフィン・脳内麻薬と呼ばれている。つまり、当人にとっては苦しみとは感じなくなるのだという。この物質の働きを小説仕立てにすると、こういう正一の話になるかもしれない。身へのダメージが大きければそのまま死に至るだろうし、修復が叶えば、回復して脳内麻薬が減り、目覚めるだろう。脳内麻薬とはうまい名付けだと思う。見つけ出す人にもおそれいる。

小説では正一が死んだとも生き返ったとも書かれていない。

【忘れざる人々のおもかげをむねいっぱい抱えて、僕はもう一度地下鉄から生まれた。】
というのだから、今生で目覚めたはずだ。

かのエンドルフィン、多幸感をもたらすそうだ。うまくいくと、幸せ感に満ちている間に、大きな苦痛は減ってくるのかもしれない。臨死体験があるとされる人は、たいてい、気持ちが良かったと言われている。最近、エンドルフィンの出やすい体質の研究などというもある。

小説は、架空と現実の狭間部分を大きく膨らませて、この人生の様々な形を見せようとする。自分1人では知りようもない隣人の心の深さなのだから。

『おもかげ』を読んで

◆ 【 YA 】

主人公竹脇正一にまつわる印象が強く残ったものがある。先ず地下鉄が象徴的だ。

長年仕事場に通り、看護師直子と知り合ったのも地下鉄だ。そして定年退職の日に贈られたお祝いのお花束を抱えたまま倒れたのも地下鉄だ。

社会背景が強く残る戦後の生活の中で、母と子が生きるために引き裂かれて出自が空白となり、それに蓋をして生きてきた。そして結婚後、妻節子との息子春哉を4才で失う。

定年までの人生の軌跡の中で、これほどの重いものを背負って懸命に生きてきた竹脇の精神と肉体。

地下鉄で倒れ、病院に運び込まれ、生死の境をさまよう竹脇の肉体と心が切り離されて行く様は、何とも切なく哀しい。

やがてそれは遊離し浮遊して、竹脇自身が様々な旅を続けてゆくことになっていく。竹脇の濃密だった数十年の郷愁や思い出、喜び楽しみ、苦しみ哀しみと共に、一緒に旅するのも竹脇の人生を彩り、共に生きた人達だ。母との確執も薄れ[生きる]ことの大切さを知る。

今を生きる人も同じと思う。人生を振り返る時、きっと竹脇と同じ様な旅をするだろう。沢山の思い出が錯綜するが、たちまち現実には引き戻される。

竹脇も夢か現か分からぬ肉体と精神の中で、様々な旅を送り、人生の終わりを締めくくる

ことが出来たに違いない。

そして彼の最後の望みは、大人に成長した春哉と[Good Luck]と二人で笑いながら、何処までも地下鉄に乗って旅を続けることだろう。

◆【 TK 】

ほっこりあたたかい小説を読めました。

特にラスト約 50 ページはわずか 15 歳の母親が登場しあたたかいクリスマスの風景がでてきます。対称的にそのなかで戦後の人たちとみなし子達のつらさを描いている。

私はわずか 15 歳の母親が我が子を置き去りにした光景をドラマチックに感じた。15 歳で生きていくのは大変ですが置き去りにされた子供も当然哀しすぎる。電車を降りてドアが閉まった瞬間の赤ちゃんの表情を想像するだけで胸に迫ってくる。

主人公の人生を回想して心を整理している。

親のいない子供の人生がテーマに感じました。

ある日突然裕福な親が迎えに来てくれるかも？とか、しがらみのない人生も良いところがある。とも感じていた。

◆【 T 】

主人公の竹脇正一(まさかず)は、昭和 26(1951)年生まれの 65 歳。定年を迎え、自分の送別会の帰りに倒れ、集中治療室に運び込まれた。病室に訪れた、同期入社で社長になった堀田・妻節子・娘婿の武志・幼なじみで同じ養護施設で過ごした大工の棟梁の徹などの言葉から正一の人生が見えてくる。

彼らの言葉から正一に対する強い思い、感謝、思慕…があふれていたが、正一は、自分の出自がわからず、苗字も名前も借り物のような状態で生きてきて劣等感から逃れられなかった。武志曰く、世の中の不幸の標本のような人生だった。大きな夢ではなく、サラリーマンになって結婚して家を立てて子供を育てたいという夢しか持てず、誠実に定年まで勤めたが満ち足りない思いがあったのだろう。

しかし、彼は、不思議な体験をした。チューブに縛られたベッドから抜け出し、80 歳のマダムネージュとディナーをしたり、入江静と名乗る 60 歳の女性と夏の入江で語らったり、隣のベッドの榊原勝男と銭湯に行き、屋台で酒を飲んだりした。35 歳の峰子とも出会った。様々な時間を彷徨いながら自分の過去と出会うことで生きることに希望をもつようになった。マダムネージュも入江静も峰子も、母と別れた時、もう一度年を重ねた母と会いたいと願った自分が望んだ母の姿だということがわかったから。

母峰子が、殺すのではなく、別れるのではなく、捨てるのでもなくて、生かすために正一を地下鉄の中に置きざりにしたことは、15 歳で、家庭の助けも社会の援助もない中で母が考えた最善のやり方だったと知る。また、自分が多くの人の祝福を一身に享けて地下鉄の中で生

まれたことを知る。自分は不幸ではなく世界一幸福な出自を持っているとわかり、また、最後に現れた春哉から、「百歳になったお父さんともう一度地下鉄に乗りたい。」と言われたことで、きっと、意識が戻り、幸せな残された人生を送ったんだろうなと思う。

◆【 KH 】

切ない

地下鉄の中に置き去りにされた主人公。

でも、お母さんも僕も生きていくために、僕を黄色いゆりかご(地下鉄)に託した。

親とは戦争ではぐれ、(死別かどうか?)誰一人頼れる知り合いもいない。戦争に、時代に翻弄され、それでも彼女はぎりぎり追い詰められながら見事な選択をした。なんて劇的な展開。場面場面が映画のワンシーンのように目に浮かぶ、上手いなあと呟きながら読み進めた。教えていただいたドラマを見てみたい。

クライマックスに向け 空白の戸籍を埋めるべく、次々に明かされる主人公と母の過去。

読後感が爽やかで、希望を持てる終わり方が好きだと言われる意見に私も、全く同感だった。読み進めながら、心肺維持装置のアラームがなり出したあたりで ああ、やはりこの人は、戸籍の空白を埋め、出自が決して恥ずかしいものでも、文字通りの空白でもなかったことを知った後に、天に召されるのか。。。完全に感情移入してどうか蘇ってと願う自分がいた。僕はもう1度、地下鉄から生まれた。母に置き去りにされたのではなく、クリスマスの日に地下鉄で“産声”をあげ～65年後に再び～リボーン。

私事を申し上げて恐縮だが、峰子さんの年齢は(自称昭和8年酉年生まれ)私の母と同じ。母は、私が60歳の時に他界。4人家族で一番に、結婚により生家の戸籍から抜けているくせに、ひとり文字通り“置き去り”にされたような、寂しさ、虚しさに襲われた。自分の生家の戸籍が抹消されることを、母の死亡届を出しに行き、初めて知った瞬間。そういう事になるのかという驚きと、その後に襲ってきた喪失感。夫、子ども、孫にも恵まれていて、何をたわけたことを！叱られても弁明できない。でもあの時は、限りなくひとりぼっち、みんな逝ってしまった、、、という喪失感でいっぱいだった。

読了後、3年前が蘇った。60にもなって、お母さんに“おいていかれた”感をこれ程強く感じるとは予想だにできなかった。私は、童女がそうするように、“えーん”と声をあげて泣いた。時が過ぎ、ふと思いが当たった。60歳一還暦は、ある意味“リボーン”そうか！リボーンだ。新しく生まれた気持ちで、60年目からの人生を生きていくしかないのだ。“時”に心の傷を少しずつ癒してもらいつつ、今を生きている。

子どもを置き去りにするというけれども“皆、親しい人、愛する人から置き去りにされて生きていくのだから。(表現が違っていたら御免なさい)吉川先生がおっしゃる通り、何かにつけて自分サイド(片側)からしか物を見られない、考えられない。限界を広げ、視野を広げるきっかけは、そこら中に転がっている。気づきをいただける読書会は、予想通り楽しい。

◆【望月悦子】

浅田次郎は、自分のことを小説の「大衆食堂」と称しています。時代小説・歴史小説・現代小説など幅広いテーマで、老若男女に支持されているとのこと。

私は、彼の作品の「一路」「蒼穹の昴」「壬生義士伝」しか読んだことはなかったのですが、調べてみると確かにいろんなジャンルの作品を書いていることが分かりました。課題本の「おもかげ」をはじめ、総じて弱者の立場が主軸となった作品が多いのは、来歴による彼の生い立ちに影響されているように思えました。

「おもかげ」は「幽体離脱」という方法を取り入れているからか、私にとって馴染みのない構想に戸惑い理解に苦しむ小説でした。例会で皆さんの意見を聞いているうちに「起承転結」でまとめると理解できるのではないかと考えました。

「起」は65歳の主人公竹脇が脳梗塞で危篤状態になったところから展開しています。

「承」は登場人物のほとんどが自分の出自を知らないので、過去を振り返らないで現在に重点を置いたやさしい人間関係を築き乍ら社会に貢献しています。

「転」は主人公の魂が病院から抜けて自分の過去と対面し、過去が明らかになっていきます。

「結」は奇跡的に助かり、素直な気持ちで家族と向き合えるようになっていきます。

以上のように自分流にまとめると、作者自身の生育と重なる部分からこの作品は生まれたのではないのだろうかと思えました。その中で、自分の過去と向き合わないと、明るい未来が見えてこないということが結論ではないのかと。

改めて親から聞いている私の出自のことを思い出しました。5人兄弟(兄・兄・私・妹・弟)、両親の親たちは早くに亡くなって、今でいう核家族で育ちました。友達からおばあちゃんやおじいちゃんの話を書くときは羨ましいといつも思っていたことを思い出します。2人の兄の後に誕生した私は、女の子が欲しくて大変喜ばれて生まれたようで名前は「悦子」とすぐ命名されたそうです。3つ違いの次兄は5歳の時交通事故で亡くなってしまいました。母の嘆きは半端ではなかったようで、親より早く死んではいけないことを脳に刷り込まれたように思います。亡くなった次兄の名前は「孝」当時私は2歳だったからか次兄の記録は何もありません。ただ親から聞かされている次兄は「頭がよく、優しく活発な子」だったようです。妹は「孝子」弟は「孝人」と名付けられています。その由来は聞いていませんが、親の思いの中では、きっと弟や妹を通して次兄は生きていたのではないかと思います。親から聞かされている自分自身の出自を思い出すたびに、親の愛情を感じほっこりとうれしい気持ちに満たされます。それだけに、戸籍の空白に対しては想像以上に虚しさやるせなさを痛感し、そこから抜け出すためには過去に向き合わないと、現在がしっかり生きていけないし、明るい未来につなげていくことができないのだというのが作者の意図ではないかと思いました。自分を捨てた母を恨みながらも心の底では会いたいと切望していることが、歳を重ねた母を35歳の峰子、60歳の静、80歳のマダムネージュとして登場させていることで分かります。

「おもかげ」は切ない中にも優しさがふんだんに取り入れられ、最後は幸せで終わるので心地よく読めました。

◆【 MM 】

今月も途中まで読んでの参加になってしまった。読書会后、最後まで読んで感情の波が起こると同時に、最後まで読んでいけばこれがみんなと共有できたのに…と後悔した。地下鉄を上手に使いながら何人もの登場人物がすーっと入ってくる。主人公正一の心の中にいた登場人物は少し前、時にはずっと前…いろんな年代から現れる。正一は自分の出自や過去のことに蓋をして生きてきたが瀕死に陥ったとき体から離れて体験したことは心の中にずっとあったことだったのか。それとも忘れようとしていたこと、なかったこととしていたことが正一に見せてくれたのか。「棄児だったと思っていたかもしれないが、同時に生かされたのだ」という話が読書会で出た。名前がなかったことだって、すべての可能性があなたにはある、という母からの希望だったのかもしれない。私が母の立場だったら自分も生き残る、というよりも最低でもこの子だけは生きていて欲しいという気持ちで離れたのかなあと想像する。棄児と聞いて、かわいそうと思うのは一つの価値観。棄てられたのではなく生かされたのだ。生き残るために。

読めば読むほどに当日私が話したことは途中経過であり、とんちんかんだったなあと思う。主人公がポジティブなんて思いもしなかった。どんなに出世して世間からは幸せそうに見えようとも不幸な出自というイメージをぬぐえなかった。後半で周りの人の想いがどんなに温かいか思い知らされた。そして主人公自体がポジティブシンキングだったとは。だからこその物語はぼんやりでも希望を感じるところで幕をひくことができたのだろう。

物語の中で一番はっとした表現は「みんなが不幸なときの不幸と、みんなが幸福なときの不幸はちがう」というところだ。これは峰子(正一の母)が65歳の正一に言った言葉だ。思いもしなかったが本当にそうだ。これは正一には突き刺さったのだろう、嗚咽が漏れるほどに泣いた。こう言えたのは手放したあとの正一を想像したからか。それと同時に言葉では言われていない(それでもあなたは頑張ったわね)という峰子の気持ちも見えてくる気がする。

読書会ではこの物語には希望を感じる、という話が出た。正一が意識を取り戻すのかどうかまでは描かれていないが、良い方に転がる雰囲気を残すのがうまいなあとと思った。希望を感じる物語を書くのがうまい作家が好きだ。反対にどこまで読んでもほの暗い感じを残す作家もいる。それもまた嫌いではない。「ああ、これからどうなるの…」と思いながら読み進めてしまうからだ。本を通していろんな体験ができるのだから読書ってほんとうにいいものですよ(いつかの映画評論家のように…)。

今月はいつもにも増して考えさせられる有意義な読書会となった。「ひとつの価値観が出たらその反対も同時に出るように」「表と裏が同時にみえるように」。今回だけでなくこれまでの話から得た私の感覚ですが、自分の目からみえる世界と、自分の目から離れて、俯瞰で見ているイメージをもつと反対の感覚も得やすいのではないかと。読書会に参加するようになるまでは自分の目から見える世界がすべてでした。しかし、そうではないということを知ること、そして受け入れるようになること。これを意識するようになったら以前の私って何だったのだろう、というくらい見える世界が変わりました。みなさんの話を聞く機会が毎月あるというのはありがたいことです。これからもよろしくお願ひします。